

V. HOPE プロジェクト

日本学術振興会先端研究拠点事業 HOPE

HOPE プロジェクト（「人間の進化の霊長類的起源」の研究）は、日本学術振興会先端研究拠点事業として2004年2月1日から開始され、2009年3月31日に終了した。先端研究拠点事業とは、我が国と複数の学術先進諸国における先端研究拠点間の交流を促進することにより、国際的な先端研究ネットワークを構築し、戦略的共同研究体制を運営するものである。HOPE プロジェクトは、平成18年度より事業計画を「国際戦略型」に移行し、平成20年度まで、継続的に活発な国際共同研究システムとして機能してきた。

1 先端研究拠点事業 HOPE の事業計画

独立行政法人・日本学術振興会（JSPS）は、学術の国際交流に関する諸事業の一環として、我が国において重点的に研究すべき先端分野における、我が国と複数の学術先進諸国の中核的研究拠点をつなぐ持続的な協力関係を確立することにより、21世紀の国際的な先端研究ネットワークを形成し、それを戦略的に運営することを目的とした事業を平成15年秋に開始した。これが先端研究拠点事業と呼ばれるものである。対象分野は、我が国の各学術領域において先端的と認められる分野であり、かつ、交流相手国においても先端的と認められている分野である。なお、共同事業の対象国は、米国、カナダ、オーストリア、ベルギー、フィンランド、フランス、ドイツ、イタリア、オランダ、スペイン、スウェーデン、スイス、英国、オーストラリア、ニュージーランドの15ヶ国に限定されている。京都大学霊長類研究所とマックスプランク進化人類学研究所の共同事業であるHOPEプロジェクトが、その第1号に選ばれた。

HOPE事業は、霊長類研究所の観点から言えば、文部科学省（当時文部省）のCOE拠点形成事業（竹中修代表、平成10-14年度）の基礎の上にならって、後継の21世紀COEプログラム（平成14-18年度）と連動して、先人の努力を後継発展するものと位置づけられる。こうした国際的研究拠点の創出は、中期計画・中期目標（平成16-21年度）にそって全所的に取り組む課題と認識されている。そのため、事業の採択通知を受けて、所内に「HOPE事業推進委員会」を発足し、「事業計画の指針」を検討立案して、協議委員会に了承された。

その指針に基づき、「拠点形成促進型」（平成16年度から17年度）を終了した。そして、平成18年度より事業計画を「国際戦略型」へ移行し、プロジェクトが終

了となる平成20年度まで国際集会の開催に力を入れつつ、以下の事業をおこなった。

1) 共同研究事業の実施

共同研究事業（野外研究を含む）は、「心」「体」「社会」「ゲノム」という4つの視点・領域から、人間の本性の霊長類的起源を探り、先端的研究領域を開拓することを第一の目的としている。具体的には、国際的共同研究の実施打ち合わせならびにその予備調査を行い、共同研究のために若手研究者を長期に派遣および招聘を行った。また、研究基盤としての海外研究拠点の形成・育成を図り、人材の有効な交流のため、日本人若手研究者の国際学会での発表や情報交換、ポスドクならびに大学院生等の若手研究者の海外での研究成果発表を支援してきた。

全視点・全領域にわたり、国外拠点と共同研究を進める途上国を含めた世界各国の研究陣との有効な情報交換を進め、研究成果に結びつけることを目標にして事業を推進してきた。

2) セミナー・国際集会事業の実施

共同研究の成果発表や情報交換のためのセミナー、レクチャー、ワークショップ、シンポジウム等を企画実行した。開催地は国内外を問わず、他の事業・企画と連携して、我が国における研究拠点としての役割を果たすことを目的とした。また、こうした国際集会のための海外渡航費用を支援してきた。平成20年度も海外から各研究分野における著名な研究者を招き、研究交流を行った。ひとつは、チンパンジーの行動とホルモンの関係を永年研究しているニューメキシコ大学のメリッサ・エメリー・トンプソン氏を招聘してセミナーを開催した。メリッサ・エメリー・トンプソン氏は、「チンパンジーの繁殖年齢」と題して講演し、メスのチンパンジーの行動に影響を及ぼすホルモンなどについての研究成果を発表した。また、ドイツのマックスプランク進化人類研究所からクリケット・ザンツ氏を招聘し、「コンゴ共和国北部に住むチンパンジーの生態と行動」と題して、コンゴ共和国での永年にわたる調査研究成果について発表するセミナーを開催し、参加者と活発な議論を交わした。

3) 若手向けプログラムの実施

HOPEは本体事業とは別に、若手向けプログラム開催事業を運営してきた。これは、国内外から卓越した研究者を講演者として招き、おもに若手研究者を対象に議論を進めるという目的で開催する事業である。HOPEプ

プロジェクトの最終年度となる平成 20 年度は、国内外より 14 名の著名な研究者を講師として招き、東京大学駒場キャンパスにおいて 11 月 15-18 日の日程で、HOPE 国際シンポジウム 2008 「人間の進化の霊長類的起源」を開催した。会期中は約 300 名の参加者があった。国内外から参加した若手研究者にとっては、最新の霊長類研究を学ぶ絶好の機会であり、第一線で活躍する研究者と意見交換するなど有意義な交流の場となった。

4) 出版・ネットワーク関連事業

すでに霊長類研究所に常置されている HOPE ホームページは国内外の霊長類研究の情報発信的機軸として機能し、多くの利用者に親しまれてきた。当ホームページでは、HOPE の派遣事業参加者全員の渡航報告と研究成果を写真入りで掲載してきた。また、HOPE 事業参加者の原著論文、書籍、総説などの研究成果も、年度別に一覧表にして、HOPE のホームページに掲載している。

2 HOPE の組織

HOPE の事業を推進するために、研究所内に HOPE 事業推進委員会を設けている。毎月 1 回程度、委員会を開催して、事業の進行具合を検討し、事業の立案の作業をおこない、提案された事業の審査などをおこなってきた。各年度の事業委員会の構成は以下のとおりである。

<平成 15 年度>

松沢哲郎、茂原信生、竹中修、上原重男、松林清明、渡邊邦夫

<平成 16 年度>

松沢哲郎、茂原信生、竹中修、マイケル・ハフマン、景山節

<平成 17 年度>

松沢哲郎、茂原信生、林基治、マイケル・ハフマン、景山節、橋本千絵、平井啓久、遠藤秀紀

<平成 18 年度>

遠藤秀紀、景山節、マイケル・ハフマン、橋本千絵、林基治、平井啓久、松井智子、松沢哲郎

<平成 19 年度>

遠藤秀紀、景山節、マイケル・ハフマン、橋本千絵、林基治、平井啓久、松井智子、松沢哲郎

<平成 20 年度>

橋本千絵、景山節、マイケル・ハフマン、林基治、平井啓久、友永雅己、大石高生、松沢哲郎

なお、研究拠点内協力者は、本研究所の教員すべてとした。なお、先端研究拠点事業の特色として、中核機関である霊長類研究所の外部の研究者、「拠点外協力者」との協力連携が要請されている。HOPE 事業を推進する組織を、おおまかな研究対象ごとに 4 区分して班を構成した。「心、身体、社会、ゲノム」の 4 班である。それぞれの班にかかわる拠点外協力者を下記の方々に委嘱してきた。

<「心」研究班>

長谷川寿一（東大）、藤田和生（京大・文）、入来篤史（理化学研究所）

<「身体」研究班>

諏訪元（東大）、中務真人（京大・理）

<「社会」研究班>

山極壽一（京大・理）、山越言（京大・アジア・アフリカ地域研究研究科）

<「ゲノム」研究班>

藤山秋佐夫（情報学研究所）、斉藤成也（遺伝学研究所）、村山美穂（京大・野生動物研究センター）

提携する海外の中核的研究拠点は以下のとおり。まずドイツについては、平成 15 年度末に日本学術振興会 <小野元之理事長> とマックスプランク協会 <ピーター・グルス理事長> のあいだで交わされた協定書をもとに、京都大学霊長類研究所とマックスプランク進化人類学研究所が共同しておこなう事業と位置づけられた。平成 16 年度には、米国のハーバード大学人類学部を米国の中核的研究拠点として日独米の 3 国での提携を始めた。平成 18 年度より新たに提携したイタリアの認知科学工学研究所とイギリスのケンブリッジ大学とも研究提携を進めてきた。

それぞれの国の中核機関とその研究協力者は以下のとおりである。

ドイツ、マックスプランク進化人類学研究所（平成 15 年度発足）

Max Plank Institute for Evolutionary Anthropology (MPIEVA)

Michael Tomasello, Department of Developmental and Comparative Psychology

Christophe Boesch, Department of Primatology

Svante Paabo, Department of Evolutionary Genetics

Jean-Jacques Hublin, Department of Human Evolution

アメリカ、ハーバード大学人類学部（平成 16 年度発足）

Department of Anthropology, Harvard University

Richard Wrangham, Primatology

Daniel Lieberman, Skeletal Biology
Marc Hauser, Primate Cognition
David Pilbeam, Paleoanthropology

イタリア, 認知科学工学研究所 (平成 18 年度発足)

Institute for Science and Technology of Cognition
ISTC-Consiglio Nazionale delle Ricerche (CNR)
Elisabetta Visalberghi
Giovanna Spinozzi
Patrizia Poti
Giacomo Rizzolatti (Parma University, Istituto di Fisiologia Umana)

イギリス, ケンブリッジ大学生物人類学部 (平成 18 年度発足)

Department of Biological Anthropology, University of Cambridge
William McGrew
Nicola Clayton, Department of Psychology, University of Cambridge
Nathan Emery, Department of Psychology, University of Cambridge
Alex Kacelnik, Department of Zoology, University of Oxford
Dora Biro, Department of Zoology, University of Oxford
Andrew Whiten, St. Andrews University
Richard Byrne, St. Andrews University
James Anderson, Stirling University

3 HOPE プロジェクトの概要

人間の心も体も社会も、進化の産物である。「われわれはどこから来たのか」「人間の本性とは何か」、そうした根源的な問いに答えるためには、人間がどのように進化してきたのかを知る必要がある。生物としての人間は、脊椎動物の一種であり、哺乳類の一種であり、その中でも「霊長類」と呼ばれる「サルの仲間」の一種である。では人間は、他のサル類と何が同じでどこが違うのか。本プロジェクトは、人間と最も近縁な人間以外の霊長類に焦点をあてて、人間の進化の霊長類的起源 (Primate Origins of Human Evolution) を探ることを目的としている。HOPE は、その英文題目のアナグラム (頭文字を並べ替えたもの) であると同時に、野生保全への願いも込められている。人間を除くすべての霊長類は、いわゆるワシントン条約で「絶滅危惧種」に指定されている。先端的な科学研究を展開すると同時に、「進化の隣人」ともいえるサル類をシンボルとして、地球環境全体ないし生物多様性の保全に向けた努力が今こそ必要だろう。

日本は、先進諸国の中で唯一サルがすむ国である。

そうした自然・文化の背景を活かし、霊長類の研究では、世界に先駆けてユニークな成果をあげ発信してきた。今西錦司 (1902-1992) から京都大学の研究者が野生ニホンザルの社会の研究を始めたのは 1948 年である。霊長類研究所 (略称 KUPRI) が幸島で継続しているサルの研究は 60 年目を迎えつつあり、9 世代にわたる「サルの国の歴史」が紡ぎだされている。さらに 1958 年に開始したアフリカでの野生大型類人猿調査を継承し、国内外でチンパンジーの研究を発展させてきた。また、日本が創始した英文学術雑誌「プリマテス」は、2003 年からはドイツのシュプリングァー社から出版されるようになったが、現存する世界で最も古い霊長類学の学術誌である。一方、ドイツは、霊長類研究において、ウォルフガング・ケーラー (1887-1967) によるチンパンジーの知性に関する研究をはじめ長い伝統を有している。とくに、1997 年にマックスプランク進化人類学研究所 (略称 MPIEVA) が創設され、類人猿を主たる対象にして人間の進化的理解をめざす「進化人類学」的研究が急速に興隆し、この分野における西洋の研究拠点になっている。アメリカについては、ハーバード大学を始め、霊長類学の多方面で多数の研究者が活躍していることは指摘するまでもない。

HOPE プロジェクトは、それぞれの国の中核的研究拠点とそれに協力する共同研究者が、ヒトを含めた霊長類を対象に、その心と体と社会と、さらにその基盤にあるゲノムについて研究するものである。研究拠点間の国際的な協力のもと、霊長類に関する多様な研究分野が相互交流によってさらに活性化し、「人間の進化の霊長類的起源」に関する新たな知見の蓄積と研究領域の創造をめざしている。「人間はどこから来たのか」「人間とは何か」という究極的な問いに対する答えを探す学際的な共同作業だともいえる。そうした基礎的な研究こそが、「人間はどこへ行くのか」という、現代社会が抱える諸問題に対する生物学的な指針を与えることになるだろう。

そのために、生息地での野生霊長類の野外研究を含めた共同研究の実施、若手研究者の交流と育成、国際ワークショップ・シンポジウム等の開催をおこなう。また、インターネット・サイトならびにデータベースの充実や、出版活動 (とくに英文書籍による研究成果の出版シリーズの発足) を通じて、その研究成果の普及・啓発に努める。以上が HOPE プロジェクトのめざす事業である。

HOPE の財務であるが、およそ 2500 万円規模の事業が例年実施可能となっている。事業の主旨により、外国渡航旅費がほとんどすべてを占める。例年約 70 件の支援事業を実施している。HOPE プロジェクトは平成 16 年 2 月に発足、同年 3 月に京都で実施した国際集会によ

り、日独米のコーチェアが一堂に会して、京都大学霊長類研究所 (KUPRI) とマックスプランク進化人類学研究所 (MPI EVA) とハーバード大学人類学部 (HUDA) とのあいだの共同事業の基礎固めをおこない、交流を本格的に開始した。

過去の実施事業を総括してみると、ドイツのマックスプランク進化人類学研究所のマイケル・トマセロ所長をはじめとする認知発達科学の研究グループと共同して、人間の認知機能の発達とその進化的基盤に関する研究をおこなった。ドイツ側がおもに社会的知性の側面を担当し、日本側はおもに道具的知性の側面を担当した。また、マックスプランク進化人類学研究所の比較ゲノム研究部門と共同研究をおこなった。さらに、言語や認知ともからむ形態・化石資料についての情報交換をおこなった。アメリカの拠点であるハーバード大学人類学部を加えた3者で、おもに大型類人猿の野外調査をおこなった。チンパンジーについて、アフリカの東部・中央部・西部の生息域に焦点を絞って研究を重ねた。また、日本側からとりわけ強く推進した研究交流として、ザイールでの野生ボノボの野外研究と、ボルネオの野生オランウータンの野外研究がある。これらの種と地域に関しては深く研究を推進し、その生態と社会についての新たな知見を加えた。

HOPE プロジェクトの参加希望者は年々増加し、平成 20 年度は、海外派遣、シンポジウムへの招聘を併せて約 70 件の渡航事業を支援することができた。派遣国は 25 カ国以上に及び、研究者交流と現地調査を精力的に進めることができた。多国間交流を包含した野外現地調査や現地での標本資料の検討が効果的に推進されてきた。欧米諸国のみならず、タイ、ベトナム、マレーシア、カンボジア、ラオスなど、これまで調査の遅れていた国々へも調査渡航が行われ、現地において海外先進国との綿密な交流が進められた。また、多くの渡航プランが若手研究者を海外の集会や調査地に派遣することを目的としてきたため、実際の人的交流やフィールドワークを通じての若手研究者養成に関して、最大の成果を上げることができた。一例を挙げると平成 20 年 8 月にエジンバラで開催された第 22 回国際霊長類学会 (IPS) において、研究発表を行う若手研究者らの渡航を支援した。この会議は世界各地からの多数の霊長類研究者が集まる大規模な学会であり、参加した若手研究者たちにとって、世界中の関連研究者との交流を深める好機となった。若手は未来の研究活動に実際に貢献する人材であり、その国際的養成を本計画のもっとも重要な研究教育プランとして位置づけたことが、機能したと評価できる。

さらに、国際学術情報の収集、SAGA シンポジウム、

国際ヒトゲノム会議、霊長類研究所国際セミナーや会合を通じ、多領域の研究者と学術研究および教育に関する情報の交換を達成することができた。平成 20 年度の若手研究者対象プログラムでは、世界第一線で活躍する霊長類研究者を国内外から招き、最新の研究成果を発表する機会とした。一例を挙げると、ドイツのマックスプランク進化人類学研究所の研究者クリケット・ザンツ氏は、コンゴ共和国北部の森林の野生チンパンジーが道具を用いる行動を継続的に調査研究した成果について講演。また、アメリカの Great Ape Trust of Iowa で研究員をしているロバート・シューメーカー氏は、Great Ape Trust of Iowa で飼育しているオラウータンの行動に関する長年の研究と、その研究結果に基づいて導き出した動物福祉についての見解を発表した。カナダのヨーク大学のアン・ルッソン教授は、ボルネオ・スマトラ島において捕獲されたオラウータンを森へ帰すためのリハビリテーションを行い、その活動の成果と課題について講演した。会期中は連日、多数の大学院生や若手研究者が参加し、活発な討論や意見交換が進められた。若手研究者にとってこれらの演題を議論できたことは、非常に意義深かったといえる。

以上のように、人的交流を発展させながら、テーマを学際的に研究するというシステムが有効であることを HOPE 事業は証明することができた。そのため、HOPE のような研究組織間の人的交流を中心として研究遂行が、今後の学術施策の中で重要なものとされることは間違いない。大型機器や施設の導入のみならず、人と人が会い、次世代を育てつつ研究する仕組みづくりの典型的な事例といえるだろう。

4 平成 20 年度の各事業とその概要

平成 20 年度の各事業内容を以下に列挙する。なお、各事業の詳細については、HOPE 事業のインターネット・サイト上で、和文・英文の双方で報告しているので参照されたい。 <http://www.pri.kyoto-u.ac.jp/hope/>

2008 年度参加者一覧

事業番号 1, 派遣 (若手交流)

Zhang Peng (京大霊長類研・大学院生 DC)

Attending 23th International Primatology Society Congress.

イギリス

2008 年 7 月 29 日～8 月 12 日

事業番号 2, 派遣 (共同研究)

中務真人 (京大理学研究科・准教授)
樹上性有袋類と類人猿の骨格に見られる収斂進化
オーストラリア
2009年3月16日～3月25日

事業番号 3, 派遣 (若手交流)

松田一希 (北海道大学・院生 DC)
キナバタンガン川下流域のテングザルの社会・生態
学研究
マレーシア
2008年9月16日～10月15日
2008年11月24日～12月8日
2009年2月24日～3月10日

事業番号 4, 派遣 (共同研究)

坂巻哲也 (明治学院大学・助教)
チンパンジーの行動の多様性研究のためのウガンダ
共和国, カリンズ森林でのチンパンジー調査
ウガンダ
2009年1月25日～3月12日

事業番号 5, 派遣 (共同研究)

佐藤至 (神奈川県警察・法医科長)
非核 DNA を利用したサル被毛からの種族特定
イタリア・クロアチア
2008年9月30日～10月11日

事業番号 6, 派遣 (若手交流)

森本陽 (京大文学研究科・院生 DC)
国際霊長類学会 (International Primatological Society
XXII Congress) への参加発表
イギリス
2008年8月2日～8月13日

事業番号 7, 派遣 (共同研究)

半谷吾郎 (京大霊長類研・准教授)
ダナムバレー森林保護区の霊長類の群集生態学
マレーシア
2008年5月5日～5月11日
2008年6月14日～6月22日
2008年7月16日～7月23日
2008年9月18日～9月25日
2008年10月9日～10月17日
2008年11月16日～11月21日
2008年12月17日～12月26日

事業番号 8, 派遣 (共同研究)

清水慶子 (岡山理科大学・教授)
第23回国際霊長類学会参加・発表および共同研究

打ち合わせ

イギリス
2008年8月2日～8月10日

事業番号 9, 派遣 (若手交流)

Jaman, Mohammad Firoj (京大霊長類研・大学院生 DC)
A Socio-ecological study on Rhesus Macaque (*Macaca
mulatta*): Comparison of Behavioral Activity across
Different Environmental Conditions and Food
Availability
バングラディッシュ
2008年5月8日～6月29日
2008年12月3日～2009年1月24日

事業番号 10, 派遣 (共同研究)

福地亮 (岡山大学・博士研究員)
タイ北部に分布する新第三系陸生層から産出する脊
椎動物化石の化石成因論
タイ
2008年7月10日～8月4日

事業番号 11, 派遣 (共同研究)

Huffman Michael A (京大霊長類研・准教授)
Extensive distribution survey of Sri Lankan primates and
field observation of macaque species in Northern India
スリランカ, インド
2009年2月17日～3月23日

事業番号 12, 派遣 (共同研究)

田代靖子 (林原生物化学研究所・研究員)
飼育ボノボにおける社会的行動の発達に関する研究
コンゴ共和国
2009年2月18日～3月12日

事業番号 13, 派遣 (若手交流)

小薮大輔 (東京大学・大学院生 DC)
コロブス亜科霊長類における顔面頭蓋の形態的多様
性進化の解明
シンガポール
2008年9月21日～10月17日
アメリカ
2009年3月1日～3月15日

事業番号 14, 派遣 (共同研究)

Leca, Jean-Baptiste (京大霊長類研・外国人特別研究
員)
First study of stone handling behavior in longtailed
macaques: Toward a cross-species comparison of a
macaque tradition
インドネシア
2008年8月14日～8月29日

事業番号 15, 派遣 (若手交流)

Nahallage, Charmalie Anuradhie Dona (京大霊長類研・院生DC)

Comparison of stone handling behavior in four *Macaca fascicularis* troops at the Padangtegal Monkey forest in Ubud Bali, Indonesia

インドネシア

2008年8月14日～8月29日

事業番号 16, 派遣 (若手交流)

金森朝子 (東京工業大学・院生DC)

野生オランウータンのオスの社会行動に関する研究
マレーシア

2008年6月15日～6月20日

2008年8月7日～8月25日

事業番号 17, 派遣 (共同研究)

近藤恵 (お茶の水女子大学・助教)

東アジアのホモ・エレクトスに関する年代学的研究
ドイツ

2008年9月23日～10月3日

事業番号 18, 派遣 (共同研究)

中川良平 (愛知教育大学・研究生)

東アジアのマカク属の起源と生息環境に関する研究
—第4紀の哺乳類化石群集からの推察—

中国

2008年6月6日～6月19日

2008年11月13日～11月25日

事業番号 19, 派遣 (共同研究)

國松豊 (京大霊長類研・助教)

東アフリカ中新世類人猿化石に関する形態学的研究
イギリス

2009年1月10日～1月25日

事業番号 21, 派遣 (共同研究)

宮地重弘 (京大霊長類研・准教授)

北米神経科学会出席および情報収集
アメリカ

2008年11月14日～11月21日

事業番号 22, 派遣 (共同研究)

河村善也 (愛知教育大学・教授)

共伴化石にもとづく東アジアの第四紀霊長類と人類
の生息環境の復元

中国

2008年6月6日～6月19日

2009年2月28日～3月11日

台湾

2008年10月30日～11月8日

事業番号 23, 派遣 (共同研究)

久世濃子 (京大理学研究科・研究員)

原生林に生息する野生ボルネオ・オランウータンの
生態と社会に関する調査

マレーシア

2008年6月3日～6月27日

2008年12月16日～12月24日

2009年2月3日～3月13日

事業番号 24, 派遣 (共同研究)

井上雅仁 (京大霊長類研・教務補佐員)

北米神経科学会出席と研究情報収集
アメリカ

2007年11月14日～11月22日

事業番号 25, 派遣 (共同研究)

木村大治 (京大アジア・アフリカ地域研究研究科・准
教授)

コンゴ共和国赤道州ワンバ地区における住民の森林
利用に関する研究

コンゴ共和国

2008年8月20日～9月25日

事業番号 26, 派遣 (若手交流)

MacIntosh, Andrew James Jonathan (京大霊長類研・院
生DC)

アメリカ霊長類学会大会参加発表

アメリカ

2008年6月16日～6月24日

事業番号 27, 派遣 (若手交流)

鴻池菜保 (京大霊長類研・院生DC)

北米神経科学会出席および研究成果発表

アメリカ

2008年11月14日～11月21日

事業番号 28, 派遣 (共同研究)

三上章允 (京大霊長類研・教授)

国際霊長類学会出席ならびに研究情報収集
イギリス

2008年8月2日～8月6日

事業番号 29, 派遣 (共同研究)

黒田末壽 (滋賀県立大学・教授)

コンゴ共和国ワンバ地区に生息するボノボの社会集
団構造の研究および保護の推進

コンゴ共和国

- 2008年8月20日～9月25日
- 事業番号 30, 派遣 (若手交流)**
 村山美穂 (京大野生動物研究センター・教授)
 国際霊長類学会出席, 及び Max Planck Institute における研究打合せ
 イギリス, ドイツ, イタリア
 2008年8月2日～8月13日
- 事業番号 31, 派遣 (共同研究)**
 宮部貴子 (京大霊長類研・助教)
 グラスゴー大学, エジンバラ大学獣医学部視察, 研究連絡および国際霊長類学会参加
 イギリス
 2008年8月2日～8月16日
- 事業番号 32, 派遣 (共同研究)**
 高井正成 (京大霊長類研・教授)
 シベリア南部のウドゥンガ地域から見つかっている鮮新世のコロプス類化石の解析
 ロシア
 2008年5月16日～5月25日
- 事業番号 34, 派遣 (若手交流)**
 酒井朋子 (京大霊長類研・院生 DC)
 国際霊長類学会出席ならびに研究情報収集
 イギリス
 2008年8月2日～8月10日
- 事業番号 35, 派遣 (共同研究)**
 仲谷英夫 (鹿児島大学・教授)
 有蹄類臼歯の Mesowear 解析による鮮新世霊長類の古環境解析
 ロシア
 2008年11月17日～11月26日
 ドイツ, フィンランド
 2009年2月17日～2月24日
- 事業番号 36, 派遣 (共同研究)**
 清水大輔 (日本モンキーセンター・リサーチフェロー)
 IPS ポストコンgressシンポジウムへの参加
 イギリス
 2008年8月4日～8月15日
- 事業番号 37, 派遣 (共同研究)**
 松原幹 (京大霊長類研・教務補佐員)
 国際霊長類学会出席と研究情報収集
 イギリス
 2008年8月2日～8月30日
- 事業番号 38, 派遣 (共同研究)**
 伊藤麻里子 (名古屋大学・技術職員)
 第22回国際霊長類学会に出席ならびに研究発表
 イギリス
 2007年8月3日～8月10日
- 事業番号 39, 派遣 (若手交流)**
 大石元治 (麻布大学・院生 DC)
 類人猿の上肢における比較形態学的検討
 アメリカ
 2008年9月16日～9月30日
- 事業番号 40, 派遣 (共同研究)**
 下岡ゆき子 (帝京科学大学・講師)
 第22回国際霊長類学会への出席と情報収集
 イギリス
 2008年8月3日～8月10日
- 事業番号 41, 派遣 (共同研究)**
 井上英治 (京大理学部・教務補佐員)
 国際霊長類学会参加・発表 および野生霊長類の遺伝学的研究に関する情報交換
 ドイツ, イギリス, イタリア
 2008年8月2日～8月13日
- 事業番号 42, 派遣 (共同研究)**
 川本芳 (京大霊長類研・准教授)
 バングラデシュのアカゲザルの集団遺伝学的研究
 バングラディッシュ, ブータン
 2008年8月2日～8月30日
- 事業番号 43, 派遣 (共同研究)**
 郷康広 (京大理学研究科・グローバル COE 助教)
 国際分子生物進化学会 (Society for Molecular Biology and Evolution) 出席および研究発表
 スペイン
 2008年6月5日～6月11日
- 事業番号 44, 派遣 (若手交流)**
 酒井歩 (京大文学研究科・院生 DC)
 絵画的奥行き知覚に関する生態学的要因の検討ーヒトと新世界ザルにおけるキャストシャドウ知覚ー
 アメリカ
 2008年5月8日～5月16日
- 事業番号 45, 派遣 (若手交流)**
 相馬貴代 (京大アジア・アフリカ地域研究研究科・院生 DC)
 国際霊長類学会第22回学術大会エディンバラ大会参加発表

- イギリス
2008年8月3日～8月11日
- 事業番号 46, 派遣 (共同研究)
鈴木樹理 (京大霊長類研・准教授)
動物福祉に基づく飼育下霊長類のマネージメント
および研究支援に関する調査
アメリカ
2009年2月1日～2月15日
- 事業番号 47, 派遣 (共同利用)
西村剛 (京大霊長類研・准教授)
頭蓋内部の形態学的特徴を用いたユーラシア産コ
ルス化石の系統分布に関する研究
中国
2009年3月17日～3月21日
- 事業番号 48, 派遣 (共同研究)
脇田真清 (京大霊長類研・助教)
野生チンパンジーのメスの発情による行動変化につ
いて
スイス
2008年7月12日～7月18日
- 事業番号 49, 派遣 (共同研究)
加賀谷美幸 (京大理学研究科・教務補佐員)
第22回国際霊長類学会大会への参加およびフランス
国立自然史博物館での研究打合せ
フランス, イギリス, スペイン
2008年7月24日～8月13日
- 事業番号 50, 派遣 (共同研究)
松本品子 (沖縄大学・准教授)
野生サバンナヒヒの群間関係
タンザニア共和国
2007年8月19日～9月7日
- 事業番号 51, 派遣 (共同研究)
小川秀司 (中京大学・准教授)
インドにおけるアッサム・モンキー (*Macaca
assamensis*) の行動観察と生息地状況の視察
インド
2009年2月18日～3月9日
- 事業番号 52, 派遣 (共同研究)
濱田穰 (京大霊長類研・教授)
インドシナ半島南部における霊長類の分布と生物学
的特徴
タイ, ラオス, カンボジア, ベトナム
2008年9月4日～10月7日
- 事業番号 53, 派遣 (共同研究)
大藪由美子 (京大理学研究科・研究員)
古病理学的分析による過去の人類社会における争い
の復元
中国
2008年7月8日～8月3日
- 事業番号 54, 派遣 (若手交流)
鈴木真理子 (京大霊長類研・院生 DC)
国際集会参加 第23回国際霊長類学会への参加およ
びポスター発表
イギリス
2008年8月2日～8月11日
- 事業番号 55, 派遣 (共同研究)
橋本千絵 (京大霊長類研・助教)
野生チンパンジーの遊動パターンにおける性差およ
び発情の有無による違いについて
イギリス
2008年8月2日～8月12日
- 事業番号 56, 派遣 (共同研究)
船越美穂 (所属なし)
国際霊長類学会 2008年大会 (IPS) 参加
イギリス
2008年7月31日～8月9日
- 事業番号 57, 派遣 (若手交流)
石川直樹 (京大霊長類研・大学院生 DC)
北米神経科学会出席および研究連絡
アメリカ
2008年11月14日～11月22日
- 事業番号 58, 派遣 (共同研究)
古市剛史 (京大霊長類研・教授)
コンゴ共和国ルオー保護区におけるボノボの研究と
保護の推進
イギリス, コンゴ共和国, ウガンダ
2008年8月2日～9月26日
- 事業番号 59, 派遣 (若手交流)
山崎彩夏 (東京農工大学・院生 DC)
野生オランウータンの社会的近接場面における行動
とストレスに関する予備的調査
マレーシア
2009年2月23日～3月27日
- 事業番号 60, 派遣 (若手交流)
山本真也 (京大霊長類研・院生 DC)
国際霊長類学会参加・発表とヨーロッパ研究機関・

動物園の訪問・資料収集

イギリス

2008年7月31日～8月14日

事業番号 61, 派遣 (共同研究)

遠藤秀紀 (東京大学・教授)

ボゴールにおけるツバイ類・マメジカ類標本資料

調査およびアジア野生動物医学会への参加

インドネシア

2008年8月17日～8月21日

事業番号 62, 招聘

Robert Shumaker (Great Ape Trust of Iowa・研究員)

HOPE 国際シンポジウム 2008 にて講演

アメリカ

2008年11月13日～11月22日

事業番号 63, 招聘

Michael Seres (Sanctuary for Exotic Animals・チンパン

ジーマネージメントコンサルタント)

HOPE 国際シンポジウム 2008 にて講演

アメリカ

2008年11月13日～11月25日

事業番号 64, 招聘

Anne Russon (Glendon College of York University・教授)

HOPE 国際シンポジウム 2008 にて講演

カナダ

2008年11月13日～11月19日

事業番号 65, 招聘

Sri Sutji Utami-Atmoko (Universitas National in Jakarta
・講師)

HOPE 国際シンポジウム 2008 にて講演

インドネシア

2008年11月13日～11月23日

事業番号 66, 招聘

Melissa Emery Thompson (University of New Mexico・
准教授)

HOPE 国際シンポジウム 2008 にて講演

アメリカ

2008年11月13日～11月22日

事業番号 67, 招聘

Crickette Sanz (Max Plank Institute for Evolutionary
Anthropology・研究員)

HOPE 国際シンポジウム 2008 にて講演

ドイツ

2008年11月13日～11月23日

事業番号 68, 招聘

Nicholas Mundy (University of Cambridge・研究員)

HOPE 国際シンポジウム 2008 にて講演

イギリス

2008年11月13日～11月21日

事業番号 69, 招聘

Vincent Janik (University of St. Andrews・教授)

HOPE 国際シンポジウム 2008 にて講演

イギリス

2008年11月13日～11月20日

事業番号 70, 招聘

Ekwoje Abwe (Limbe botanical Gardens・研究員)

HOPE 国際シンポジウム 2008 に参加

カメルーン

2008年11月11日～11月28日